

《書評》

『共振するデジタル人文学とデジタルアーカイブ』

鈴木親彦\*編、赤間亮\*\*ほか著、勉誠社、2023年

山本睦月†

はじめに

本書は「デジタルアーカイブ・ベーシック第2シリーズ」の2巻目として発刊されたものである。本書で中心的に扱われるデジタル人文学(DH)と本シリーズの根幹であるデジタルアーカイブ(DA)は相互に関係性が深い分野である。DHの場合、人文学にデジタルを取り入れさらに発展させていくものであるが、相互に共通する部分は持ちつつも、具体的な研究対象や作法は異なってくる。こうした「多対多」対応のなかで進展する基礎的な概念が「方法論の共有地」である。「これ」あるいは「ここ」において、個々の分野を超えてデジタル技術に関する議論・共有が可能になるため、DHから見たDAは、「方法論の共有地」における技術の一つ(または集合体)として重要である。対してDAの場合、DAが全ての人類の知・情報基盤となることを考えれば、その対象は人文学資料のみではない。DHを含む人文学は、DAが扱う分野の一つと位置付けることも可能となると編者の鈴木親彦は考察する。そのため本書の狙いは、DHとDAの共通点と相違点を自覚しつつ、相互により高度化していく可能性を見出すことである。題名にある「共振」とは、直接・間接どちらにおいても、それぞれの分野での研究の発展が、もう一方の分野の発展に寄与する可能性を示すことを企図した言葉である。

本書は内容も幅広く、第1部では長年にわたり二分野の研究を牽引してきた研究者による二分野の関係整理、第2部ではDH分野におけるDA構築について、「研究データ」という視点を組み込み、実際に行われている事業についてまとめられる。第3部では反対に、DAを軸とした人文学の研究コミュニティに関して、国内外問わず若手研究者の実践例などが挙げられる。最後に第4部では二分野に期待することが述べられる。どの論考においても、分野を推進することの重要性と、デジタル技術やそれを持つ人材と協力・交流することで生まれる新たな可能性の認識について示されている。

紙幅の関係で全てに触れることはできないため、本書の基盤に位置付けられる第1部第1章「デジタル・ヒューマニティーズとデジタルアーカイブ」と同第2章「デジタルアーカイブ社会実現に向けたレイヤー構造の必要性と人文学の役割」について以下に触れる。第1章は立命館大学文学部教授である赤間亮が執筆を担当し、赤間自身の経験則に則り、DAがどのようにDHにとっての研

---

\* 群馬県立女子大学文学部准教授

\*\* 立命館大学文学部教授

† 立命館大学大学院文学研究科博士課程

gr0517fi@ed.ritsumeai.ac.jp

究基盤となりうるのか、そして現状何が不足しているのかについて、社会に向けた提言を加えつつ整理される。続く第2章は、一般社団法人人文情報学研究所主席研究員である永崎研宣が執筆を担当し、インターネットのレイヤー構造を手がかりに、DAを成立させている諸要素を整理、DHを含む人文学が果たし得る役割について検討する。

### 1-1 「デジタル・ヒューマニティーズとデジタルアーカイブ」

赤間はまず、本文で伝統的な人文学（本文ではDHの対義語として、「トラジッショナル・ヒューマニティーズ（TH）」と称される）がデジタル時代の訪れとともに変化していく様子をまとめる。赤間は、2004年頃にWEB 2.0という言葉が使われ始めたことを契機にインターネットのインタラクティブ性が上がり、一般人にも「情報の双方向性」が実感できるようになったと指摘する。この後SNS時代に突入し生み出された言葉がDHだという。「コンピューティングと人文学が結びついた、THのあちら側、厚い壁の向こうにある遠い世界と考えられたものが、その壁に突然穴が開き、TH側からも向こう側が見えるようになった」と赤間はその変化を表現する（5頁）。

DHはまず、人文学における最も重要で普遍的な研究資源であったテキストを扱うテキストマイニング型の研究から始まると赤間は指摘する。ところが赤間が主導してきた立命館アート・リサーチセンター（ARC）はマルチメディア型DHを目指していたことに特徴があるとも述べられる。理由として、DHとは人文学にデジタル技術を導入するものであり、その技術の発達や環境の浸透が進めば当たり前になるような、人文学の一つの潮流だと捉えていたとある。ところが未だDHは消滅せず、ビジネス分野ではデジタルトランスフォーメーション（DX）が叫ばれるようになったと続く。

ビジネスの分野で提示されたDXだが、これは「高度なデジタル技術を用いて生活を改革していくこと」であり、特にコロナ禍を経て変化があったと赤間は指摘する（6頁）。人文学のDXといえば、調査と移動を伴うコミュニケーションの場を必要としてきた人文学の世界にオンラインミーティングや研究資源のオンライン配信が急激に普及したことが当てはまる。しかしながらTH型研究者は、自身の研究にもDXが「必須」であるという認識もなく、DXが進んでも自身の研究がDHに転じてきているとは思っていないということを赤間は指摘する。またDXのキーワードとして「アジャイル型開発」を挙げ、これに人文学を当てはめて考えている。アジャイル拠点をDH研究の場・開発の場として捉えると、DHは、常に新しい何かを開発し続けることと位置付けられるため消滅することがない。「デジタル技術が進化し続ける限り、人文学の研究テーマと組み合って、新たな開発が行われる」と赤間は述べる（9頁）。

DAに関しては「実際にはデジタル複製物としての役割には期限がある」ということの説明ができていない点、「永久保存するためには最高レベルの技術を使うべきだ」という主張が入りやすい点、さらに「費用の問題」が混在するために、「DAによって、文化財は永久に保存できる」という初期の誤ったスローガンによる混乱があると指摘する（14頁）。例えば技術開発系の研究者はDAとデジタル化を混同している場合もあり、彼らによってデジタル化されたデータはアーカイブされずに再生できなくなると指摘する。そのために赤間は一度、このDAを封印する必要があると述べる。

DHが対象とする文化資源のデジタル化については、以下の点が留意するべく挙げられている（15-16頁）。

- ①文化資源には、有形、無形の資源があるが、無形資源の場合、そもそも何をデジタル化するの

かが曖昧である上、デジタル化技術が成熟していない。

② DH と TH の根本的な違いは、対象とする研究素材の量である。

特に後者においては、取り扱う量が臨界点に達しない不十分なものであると TH 側の蓄積を超えることができず、DH 型研究の成果はなく分野の DH 化は望めない、と赤間は述べる。

「アーカイブ」の視点について赤間は、「DH においては、研究素材がデジタル化された上で、それが十分な量に成長・維持されるために「アーカイブ」されていく必要がある」と指摘し、それをデータベース (DB) システムが担うことになる」と述べる。DB は検索・閲覧・蓄積・編集という要素が含まれており、デジタイゼーションとデジタルライゼーションをつなげる重要な要素であるが、DB そのものに注目する議論は少ないと赤間は指摘する。協働型研究に参加するため、あるいは他領域との接点を持つためにも、定量的な研究基盤を持つ方が有効とされ、個人研究者が使える蓄積・編集システム (DB) とそのツール、特にアジャイル型のツール開発活動が望まれる。そして人文学者が自然とデジタル環境に馴染んだ際には、領域別の研究プラットフォームが求められると赤間は指摘する。

このプラットフォームは、従来の人文学の研究活動の空間が過不足なくコピーされたオンライン上のデジタル研究空間を用意すべき段階にあると赤間は考え、「デジタルツイン」上で行われるリアルな研究活動をバーチャル空間上で行うシミュレーションを繰り返して検証する成長プロセスが重要であると述べる。このバーチャルな研究空間を「リサーチスペース」と赤間は名付け、立命館大学 ARC では ARC リサーチスペースの構想を成長させ、実装させるに至った。

このリサーチスペースは、デジタル化、アーカイブ、DB、ツール、成果発信システムからなる総合研究環境だ。特徴が何点か挙げられるが、特筆すべきは次の2点だ。まず1点は、DB 横断型のアノテーションツールを提供している点である。高速でコンテンツ1ファイル単位でアノテーションが付与できる付箋型ツールである「User Memo」と、画像ファイルに対して部分切り出しをしながらアノテーションを付与できる「Image Note」の2つからなるが、特に後者はマイクロコンテンツ DB の高速な構築が可能となる。2点目は、DB 群と直結する独自のクラウドシステムを提供している点である。クラウドシステムが存在することで、一般公開できない研究資源に対しても、研究者が自身のストレージ上に複製などを保存し、セキュリティを掛け、オンライン上に置くことが容易に可能となり、リサーチスペースも機能する。このような ARC リサーチスペースは既に実用レベルに達しており、特に歴史文化芸術分野での標準プラットフォームとして提案できる段階にあると赤間は述べる。

最後に、再度「人文学研究に必要な「デジタル化」を進展させる努力は続けなければいけないこと」、「アーカイブ機能としての DB を、データ駆動させるための基盤として人文学研究者の傍に置くこと」を強調する。現在の DH は個別の試みが乱立している状態であるが、俯瞰的に見ると人文学の研究手法は分野を問わず共通する手法や資源を使っていると述べられる。しかし一方で理論と実践が乖離してしまう傾向もあり、デジタル化技術教育の面にも力を入れるべきだとも指摘する。

## 1-2 「デジタルアーカイブ社会実現に向けたレイヤー構造の必要性と人文学の役割」

永崎の整理によれば、DA はインターネットの4階層モデル (ネットワークインターフェイス層・インターネット層・トランスポート層・アプリケーション層) のなかではアプリケーション層に位

置するものと指摘される。アプリケーション同士でやり取りを行う階層のことであり、さらに DA は細かく 4 つのレイヤーに区分することができるという。基盤となるデジタルコンテンツデータのレイヤー (DA-L1)、またデータや内容を説明したり注釈したりするアノテーションのレイヤー (DA-L2)、DA-L1 の閲覧や検索・分析等ができるような仕組みとしてのインターフェイスのレイヤー (DA-L3)、多様な関心を持つユーザーに向けて伝えるための様々な手立てを行うコミュニケーションのレイヤー (DA-L4) である。DA-L1 に関しては、デジタルデータには物理的な資料をデジタル化したものと、最初からデジタルデータとして作成されたものとで扱いが異なることを言及する。DA-L2 に関しては、まず「デジタルコンテンツそのものが価値を持つことは必ずしも多くない」と指摘した上で、「コンテンツのまとめりや共通要素を見出せるような説明がつけられることがコンテンツの有用性を引き出すために極めて重要である」と言及する。DA-L3 に関しては、「デジタルコンテンツとアノテーションで構成されるデータを利用者の個々の操作とつなげる役割を果たすもの」とし、さらに細かく「表示／閲覧」「検索」「分析・視覚化」「文脈化・キュレーション」のつながりについて言及する。DA-L4 に関しては、アウトリーチ活動を含む DA のあらゆる側面を関係者や利用者、社会に対して伝えるレイヤーだと言及し、さらにフィードバックを受け、改善をも行う活動全般を指すと指摘する。

DH の営みをこれらのレイヤー構造を手掛かりに検討すると、DA-L1 においては「研究利用に耐え得るデジタルコンテンツを要求」することとなり、DA-L2 は「コンテンツに関する専門知を踏まえた解釈の提示とその共有、そして、さらなる研究の発展のために鍵となる」と言及する。DA-L3 に関しては「必要な情報にどのようにアクセスできるようにし、コンピューターによる分析結果をどのように視覚化するべきか」という研究が行われているとして例を挙げた上で、「発見・注釈・比較・参照・サンプリング・例示・表現」が必要な構成要素であると挙げた。DA-L4 に関しては、自由な研究資源へのアクセスが求められるようになった現在、「人文学の特性をうまく活かした研究データインフラストラクチャーの構築と運用が効果的であり、今後重要なテーマの一つ」となると指摘する。

最後に、DA はデジタル時代に即した新たな知識基盤であり、DH はデジタル技術を用いて人間文化を研究しようとする試みであるとした上で、DH が DA に含まれることは当然であると述べる。DH は DA に貢献し得る存在であり、それによって DH 自体もより高い評価を得られることになるという相互の関係性を指摘して締めくくっている。

## おわりに

本書では DH と DA、またそれにまつわるデジタル環境や教育現場を含む「現場」の現状が語られる。他の章でも共通して課題として多く挙げられたのは「アーカイブ」の難しさである。そもそも何をもってアーカイブというのかなどの問いはもちろん、サーバーや DB システムのアーカイブの問題、資料の再デジタル化に関する課題などがある。また若手研究者の育成に関しては、DA に関する技術の習得だけでなく、人文学的な視点、つまり物事に対する批判や情報・内容に対する吟味、内容解釈の深さなどが強く求められる現状にあることが述べられた。二分野がまだまだ発展途上にあることは本書からも明確な事実として浮かび上がった。今後本書にあるような事例を機に、二分野においては試行錯誤を繰り返しながら、高い専門性を保ちつつ誰もが気軽に参画できるようなものとなればよいのではないだろうか。